

神奈川県立鎌倉養護学校における学校運営協議会開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催した。

審議会等名称	令和2年度 神奈川県立鎌倉養護学校第3回運営協議会		
開催日時	令和3年 2月18日(木) 午前9時30分～午前11時00分		
開催場所	会議室		
出席者	委員：10名 事務局：6名		
次回開催予定日	未定		
問い合わせ先	神奈川県立鎌倉養護学校 副校長 佐藤 浩栄 電話番号 0467-45-1951 ファックス番号 0467-43-4808		
下欄に掲載するもの	議事録	議事概要とした理由	
審議(会議)経過	<p>○学校長挨拶</p> <p>○学校運営に関するアンケート結果について(副校長)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨休中は教員もとまどいがあり、ご家庭の通信状況などの調査に追われるような状況だった。 ・地域とのつながりについてはコロナ禍で学校同士の交流はできなかった。 <p>○質疑・応答</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者は子どもたちが楽しく学校に通っていると感じている。肯定的な意見が多い。コロナ禍である中でのこの受け止めはうれしいことではあるが・・・否定的2%、わからない2%、この分析が大事である。ほぼ肯定的な意見ではあるが、100%楽しいと思える学校づくりを目指してほしい。教員の否定的な評価が多い点については、コロナ禍での戸惑いもあったか。こういう状況で何かできることを。教員ひとりひとりの得意分野で「コロナ禍でも学校を充実させていく」という意欲を生かしていくとよい。 ・アンケートで「⑩地域にある資源～」のところは何を求められているのかわからない質問内容である。 ・「学校にはこんな資源がある」ということを地域にも知らせるとよいのでは。例えば、学校では初期食を調理できる。これは高齢者にもよい。車いすやストレッチなどの身体面などもそう。地域が使える資源が学校にはあるというメッセージにもなる。 ・情報発信の難しさは同じ。防災という面では、福祉避難所に学校が入ってきてくれた。「防災の授業」も一緒に取り組むことができた。一般の避難所に肢体の子どもたちが参加してきたら、おそらくカルチャーショック。昨年度の学校の防災の授業では、地域の方が避難所に見立てて受付をし、肢体の子どもたちとの関わり方を知った。それを町内会で伝えることによって「知っている」「知り合い」「支援者」が増える。継続してやっていく必要がある。 <p>○学校評価の校内評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修が多くて先生は大変。「発達障害について」「意思決定支援の基本的な考え方」についてぜひ入れてほしい。先生が知っているだけではなく、ぜひ保護者にも知ってもらいたい。 		

- ・学校には専門職がいてとてもよい。知的部門の保護者には専門職の存在はあまり知られていない。ST、PTは肢体がメインなのかと誤解している。知的部門の中にも専門職に相談したい方はいる。保護者に向けてもっと「相談してもいいよ」というアピールや親のサポートがあるとよい。
- ・年度初めに支援の紹介はあるが、耳慣れたPT、ST、OT・・・という言葉自体は耳に入っているが、具体的にどんな相談ができてどうアドバイスされたかが知れるとよい。もったいないと思う。学校に保護者が来ても支援室のある2階に上がることがない。もったいない！
- ・「子どもたちが手紙を渡さない」というのはどこも同じである。複数の方法での発信を。「HP 見てください」というアピール。QRコードを入れるとか。専門職の利用も「どうぞみなさんお気軽に」というアピールも何度でも。学校でそういう相談が専門職にできるのはとてもいい。保護者にとって一番身近なのは学校である。
- ・コロナ禍では実習に送り出す、受け入れる、見学などむずかしかった。このような状況でもできることを工夫してされている。アンケート結果⑥や⑦の進路のところ、肯定的なところはそれでいい。「わからない」という回答は、保護者も教員もなぜ「わからない」になってしまうのか。もうウイズコロナの時代、付き合いながら行う必要がある。もっと何かできるはず。それを次年度に反映していく。
- ・先日、小学生の保護者から見学をしたいという依頼があった。小学生のご家庭からの見学依頼は初めて。進路に関する部分は小学生から始まっている。具体的な取り組み、身近な取り組みが大事。身近なところ、色々な人と触れ合い、知り合う経験を。新しい環境というよりは、身近な経験を。地域資源としては、少し出かけた先の買い物でもよい。そういうところの積み重ねが大事。見学ができなくてもオンライン等、施設もできることをしていく。
- ・子どもたちは「さん付け」で呼ばれることにより、大切にされていることを理解する。呼び捨てやニックネームが親近感につながるというとらえ方をする教員もいるが、それは間違っている。

○来年度の学校運営協議会を各部会の在り方について

- ・部会については構成員を見直す。

○学校長（まとめ）

貴重な意見をありがとうございました。

- ・子どもが楽しく学校に通えている。否定的な意見については受け止めて、その意味を調査していく。
- ・学校運営に関するアンケートについては、わかりやすい設問、こたえやすいものに工夫する。
- ・HPによる発信については、どういう内容に興味を持たれ、どんな情報が必要とされているのかを探っていく。
- ・教員研修においては「発達障害について」「意思決定支援について」を組み込めるように、やり方を考える。
- ・専門職と支援室の活用については、保護者が相談しやすい場所であるよう、伝え方を工夫する。

- | | |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none">・地域との連携については、顔の見える関係を続けていく。・進路については、小学校の段階から必要な情報を保護者にお伝えしていく。・敬称教育については、「～さん」付けについて今後も継続していく。・来年度の部会はメンバーの検討をしていく。 |
|--|--|